

狩野元信筆「四季花鳥図」(大仙院) について 一描かれた珍鳥一

渡野 りつ佳 (大阪大学)

狩野元信筆「四季花鳥図」(大仙院、以下「大仙院本」)は、大徳寺の塔頭大仙院(1513年創建)檀那之間を飾る8面の襖絵であり、現在は掛幅に改装され京都国立博物館に寄託される。室内北側と東側のL字型に連続する画面に山水の景を水墨主体で描き、その前景に彩り豊かな四季の花鳥を配する。従来、中国宋元・明代の花鳥図を咀嚼し日本の襖絵の空間に連続的に展開したその図様、奥行きのある空間構成や力強さと繊細さをあわせもつ細部まで揺るぎない描写などが高く評価され、元信の代表作とされてきた。しかしながら、構図や各モチーフに関わる類品との比較検討が十分になされてきたとは言えない。本発表では、室町時代の大画面花鳥図における大仙院本の位置付けを確認した上で、鳥類を中心とした図像解釈を試みる。

大仙院本の近い時期の大画面四季花鳥図である雪舟系四季花鳥図屏風群のうち、雪舟筆「四季花鳥図屏風」(京都国立博物館)と比較すると、辻惟雄氏が指摘するように画面構成とモチーフの選択が異なる。しかし、中島純司氏、綿田稔氏の雪舟研究に指摘があるように、雪舟の弟子筋の作品において雪舟の構築的な構図は解体され諸景物は横並びに配されるが、実は大仙院本の構図はこの種の雪舟とやや距離のある室町時代大画面花鳥図の様式を踏まえつつ、中国絵画の対角線構図や余白を活かしたものと位置付けることが可能である。一方で鳥類に注目すると、管見の限り大仙院本に登場する吐綬鶏をはじめとする数種は、雪舟系花鳥図に加え同時期に京都で活動した芸愛の花鳥図にも描かれない。こうした鳥類は中島氏、並木誠士氏によって日中・日朝貿易で舶来した〈珍鳥〉と指摘されているが、大仙院本を同時代の大画面四季花鳥図と区分する重要なモチーフとみなせる。

とりわけ、吐綬鶏を描く作例は限られる。並木氏が提示された大仙院本の類例のほか先行作例としての中国絵画、元信の影響下にある17世紀前半以前の作例、17世紀半ば以降に狩野探幽周辺で描かれた作例程度しか見いだせない。吐綬鶏は、第一に雌への求愛行動のために開く肉垂が五山詩において錦と結びつけられ、蜀江錦や中国の宮廷が想起されるモチーフであった。これより吐綬鶏は、〈珍鳥〉であるだけでなく、中国の豪華な文物や情景を連想させるモチーフであったと言える。第二に漢詩および類書などでは、肉垂は春夏の晴れた日に開くとする。大仙院本において吐綬鶏はまさに春と夏の場面に位置するが、その背景には吐綬鶏についてのこうした知識があったと指摘できるだろう。

大仙院本には、先行する大画面四季花鳥図や中国の多様な作例を参照しながらも、それらとは一線を画す新しい四季花鳥図であった。漢詩や類書のイメージに基づく〈珍鳥〉の存在こそが大仙院本を特徴づけており、色鮮やかな四季の花鳥の集う異国の楽園として檀那之間を彩っていたのである。